



日本一の梅の里 「みなべ梅ラーニングコモンズ」による 人・地域・地球の健康増進





和歌山県みなべ町の概要・課題



【町の概要】

- ・紀伊半島の南西部
- ・江戸時代から梅栽培
梅生産量日本一。全国の30%
年間32千トン、産出額115億円
- ・山間部は「紀州備長炭」生産
- ・海岸部は、海釣り等海洋レジャー
や漁業も盛ん。「千里の浜」アカ
ウミガメの産卵の地
- ・人口11,734人 高齢化率32%
- ・町民の約7割が梅産業に従事
- ・基幹的梅農家2,242名のうち、
1,021名(46%)が女性
- ・町のビジョン「海山川の恵みの中
で人が輝く快適なまち」



【みなべ町と梅の歴史】

1965年	「南高梅」名称登録
1973年	「うめ課」設置
1997年	「みなべ町うめ振興館」開設
2006年	毎年6月6日を「梅の日」に
2006年	梅の健康機能研究開始。 3つの特許取得
2014年	「梅干しでおにぎり条例」施行
2015年	「梅で健康のまち」を宣言
2015年	「世界農業遺産」認定
2023年	うめ課設置50周年
2025年	世界農業遺産認定10周年 関西万博開催



FAO・世界農業遺産 (GIAHS) 「みなべ・田辺の梅システム」



【取り組む課題】

1. 経済面：日本一の梅産業

生産力の維持・販売力の強化

- ・梅農家の高齢化(70代以上が35%)
- ・日本人の和食離れ
- ・若い層で低い梅干しの購入量
- ・梅の健康機能特許を活かしきれていない

<町が有する3つの特許>

- ・抗コロナウイルス剤
- ・コラゲナーゼ阻害剤(老化の防止)
- ・α-グルコシダーゼ阻害剤(食後高血糖改善)

※ヘリコバクターピロリの運動能阻害剤は
存続期間満了により特許権は消滅

2. 社会面：梅愛で町への愛着を回復

- ・町に住み続けたい(75%)
愛着は低下(43%→27%)
- ・町民の医療費は県内で最も低い
梅摂取頻度が低い(毎日摂取は16%)
- ・次世代育成。南部高校の定員割れ

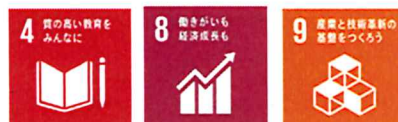
3. 環境面：持続可能な梅栽培の実現

- ・CO2削減計画が立案されていない
- ・有機農法梅農家が少ない(10軒程度)
- ・梅干し残渣の堆肥化
- ・梅剪定枝の未活用

<参考資料>

【みなべ・田辺SDGsの取り組み2019】

① リーダーや人材の育成 (ターゲット 4.4、8.6、9b)



- ・和歌山大学と共同で、梅システムの重要性や保全について実践的な人材を育成する「**梅マイスター育成プログラム**」を開始
- ・**副読本**を作成し小学校での学習に利用
- ・住民が主体となって、地域の課題、農業遺産の活用保全、それに対する対策を考案し実践する活動を通じての地域人材の育成
- ・「**山づくり塾**」に山主、農家、林業者、炭焼き職人などが参加し、山づくりの知識・技術を習得

② 梅を用いた新たな食品開発や梅の持つ健康機能性分を活用した健康増進



- ・新たな梅加工技術開発等の研究支援 (ターゲット 9.b)
- ・**梅の有する健康機能成分**をPRし、国民の健康増進に繋げるため、機能成分の医学的研究、成果の公表を産学官が一体となり推進している (ターゲット 3.d、9.b)

③ 世界農業遺産を通じた国際貢献

(ターゲット 1.a、2.a、4.4、9b)



- ・世界農業遺産を目指す国や**発展途上国**からの**農業研修を受け入れ**、GIAHS への理解を深め、農産物加工技術や栽培技術の習得、さらには、地元の若者との交流を通じ相互理解を深めている。

④ 環境保全活動

(ターゲット 6.6、14.1、15.2、12.5、11.6)

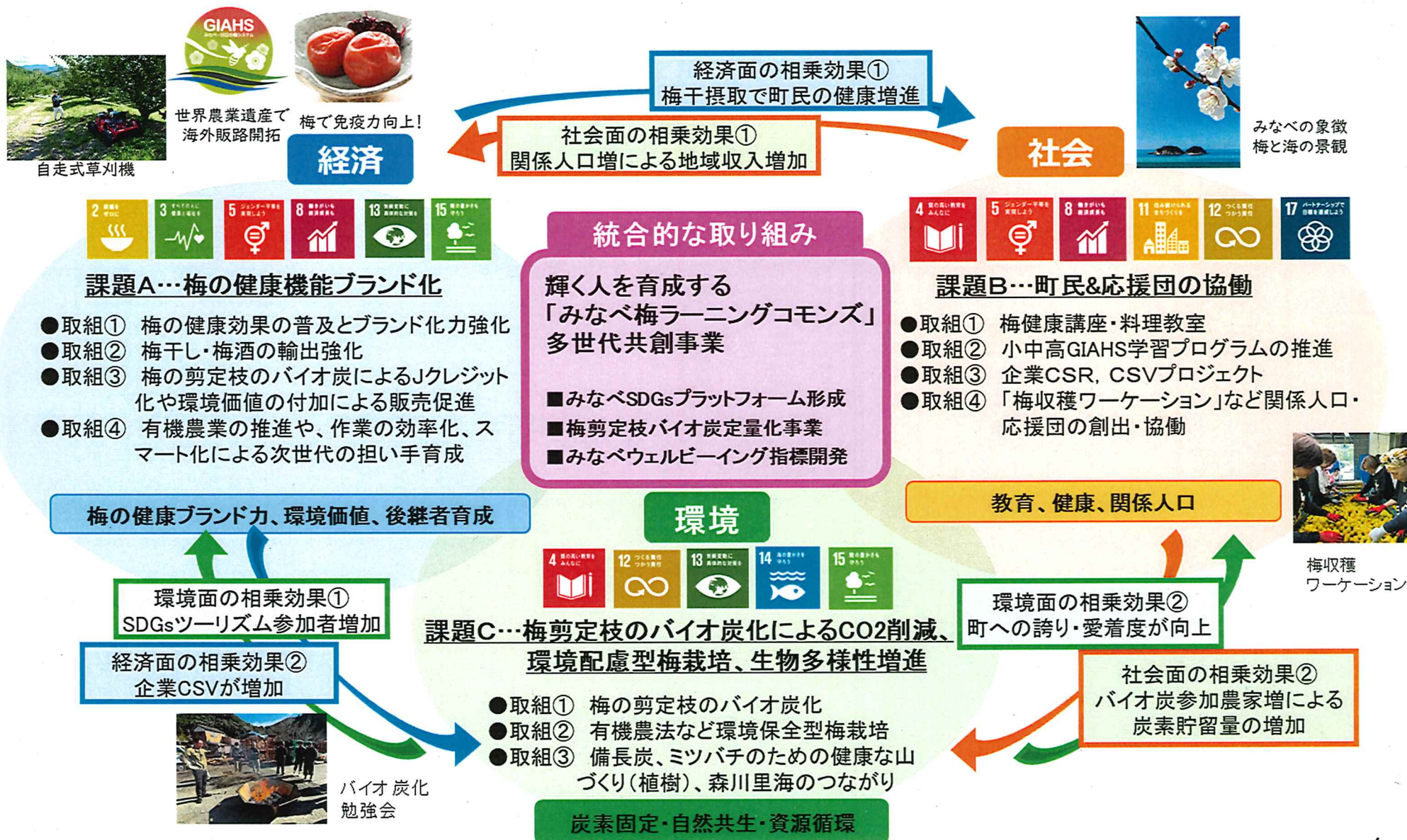


- ・梅システムの重要な要素であるミツバチ（南高梅を受粉させる）の生息調査を大学と共同で実施している。薪炭林（ウバメガシ）の維持に繋がる択伐技術の普及活動を行っている
- ・梅加工から生じる廃棄物を再利用した飼料等の開発・普及促進
- ・企業のCSR活動を利用した**企業参加型の森林保全**にも取り組んでいる

出典：田中治彦編著『SDGsとまちづくり：持続可能な地域と学びづくり』（2019年、学文社）第6章 持続可能な「農」（大和田順子）



自治体モデル事業の概要：日本一の梅の里、 「みなべ梅ラーニングコモンズ」による人・地域・地球の健康増進





三側面をつなぐ統合的取組 (自治体SDGs補助金対象事業)

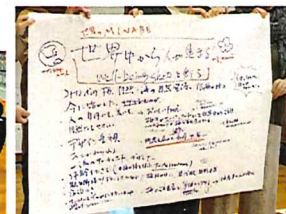


輝く人を育成する「みなべ梅ラーニングコモンズ」多世代共創事業

町民の町への愛着度を上げることを大目標とし、以下の3つの取組を通じ、町民総参加・町外応援団と連携してSDGsの推進に取り組む。

【取組1 みなべSDGsプラットフォーム】

- SDGsを推進するステークホルダープラットフォーム形成。普及啓発ツール制作。先進地域調査
- ・「みなべSDGsプラットフォーム」形成
 - ・「みなべSDGs未来デザイン会議(キックオフイベント)」開催
 - ・ワークショップの開催
 - ・「みなべウェルビーイング指標」開発



【取組2 「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム】

- ・学習する組織・みなべ町を実現する
- ・町内の中高生や大人、町外の大人(関係人口や大学と協働し、地域の課題解決策を探究・共創する場

<2024年度テーマ例>

- ・梅の健康機能PRイベント(地元、都市部、中国)
- ・日中大学生梅プロモーションコンテスト
- ・中国人大学生フィールドワーク
- ・環境配慮型栽培勉強会
- ・梅剪定枝のバイオ炭化勉強会
- ・ミツバチ巣箱調査



【取組3 バイオ炭定量化事業】

- ・炭素を除去する技術である「バイオ炭」に着目
- ・立命館大学日本バイオ炭研究センター、和歌山県工業技術センター・うめ研究所等と連携
- ・梅の剪定枝のバイオ炭化のしくみづくりに着手

<バイオ炭3つの相乗効果>

- ①未利用資源の循環
- ②田畑など土壌への炭素貯留効果
- ③土壌の生物多様性保全





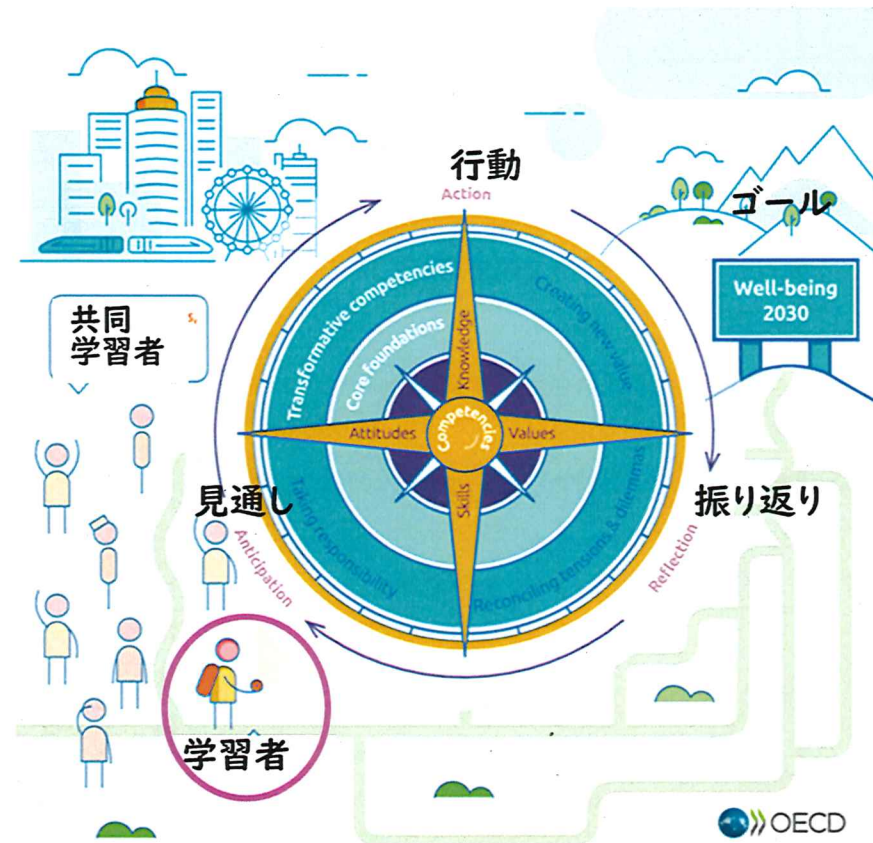
取組2)「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム①



【学習体系】 学習する組織・みなべ町を実現するためのコアとなる取り組み「みなべ梅ラーニングコモンズ」は、町内の中高生や大人、関係人口である梅収穫ワーケーション参加者や研究機関と協働し、地域の課題解決策を探究・共創する場。「OECDラーニング・コンパス2030」に準拠

「OECD ラーニング・コンパス(学びの羅針盤)2030」の考え方を取り入れた
「みなべ梅ラーニング・コモンズ」の学習体系

The OECD Learning Compass 2030



目指すゴール「ウエル・ビーイング2030」

個人と社会の幸福=人・地域・地球の健康
「ウエル・ビーイングみなべ」

スチューデント・エージェンシー

学びの主体(学習者): 中高生、町民

共同エージェンシー(共同学習者、協力者)

「梅収穫ワーケーション」に参加している都市部の大人、協力大学・研究機関

コンピテンシー(学びの基盤)

各探究プログラムを通し、「知識」、「スキル」、「態度及び価値観」を獲得。

トランスフォーマティブ・コンピテンシー(より良い未来の創造に向けた変革を起こす行動特性):

各探究プログラムを通じ、「新たな価値を創造する力」、「対立やジレンマに対処する力」、「責任ある行動をとる力」を育む。

AAR サイクル

各探究プログラム進行のプロセス「見通し→行動→振り返り」を実施し、対話・探求・共創を繰り返す。



取組2)「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム②



<2024年8つの探究テーマ>

それぞれにプロジェクトリーダーを決め、町民、役場職員、町外の専門家、および南部高校生も参加し、企画・実施（トライアルまで）を行う。8テーマで参加人数は各10人～200人を想定。

テーマ	対象者	問い:課題	内容	関わる民間団体
みなべSDGs未来デザイン	町民	・みなべのSDGsとは? ・みなべの未来を皆でデザインしよう	・キックオフイベント ・ワークショップ	・南部高校 ・一社)PCW
梅で健康①	町民	・町内の家庭では梅が料理にあまり使われていない?	・梅料理教室 ・梅給食など ・梅食育	・梅料理研究会 ・料理研究家
梅で健康②	都市で働く人	・梅干が健康食?知らなかった ・料理や飲料にどうアレンジしたらいいの?	・梅で健康講座 ・都内で試食等イベント	・一社)PCW ・梅ワー参加者 ・梅料理研究家
梅で健康③	若者	・梅干おにぎり食べてないかも・・・ ・どうすれば若い人が梅干しを食べるようになる? ・こんな梅商品・料理があったら食べたい	・フィールドワーク ・日中高大学生梅プロモーションコンテスト	・南部高校 ・関西の高大学生 ・中国の大学生 ・一社)KGSi
梅で健康④	中国人	・中国で最近梅干茶漬けやおにぎりが注目されているらしい。梅酒も	・上海でプロモーションイベント開催	・JETRO上海 ・JETRO和歌山 ・和歌山県 ・一社)KGSi
バイオ炭	農家	・バイオ炭のしくみを作り農業のCO2を減らしサステナブルな梅栽培を実践したい	・勉強会開催 ・日本バイオ炭研究センターフォーラムに参加	・みなべ梅wo炭クラブ ・南部高校 ・立命館日本バイオ炭研究センター
有機農業	農家	・環境にやさしい農業・果樹栽培を広げたい	・勉強会(町内視察) ・先進地視察	・梅農家 ・有機農業専門家
ミツバチと生物多様性	町民	・ミツバチの生態、森里川海の関係が知りたい	・ミツバチ巣箱調査 ・生きもの調査	・梅農家 ・ミツバチや生物多様性の専門家



取組2)「みなべ梅ラーニングコモンズ」地域共創プログラム③



これまでの主な取り組み事例

＜「梅収穫ワーケーション」が地方創生SDGs官民連携プラットフォーム優良事例に選定(2024年3月)＞

一社) 日本ウェルビーイング推進協議会(代表理事 島田由香氏)が主催する梅ワーには2022年のべ240人、2023年のべ382人の首都圏など都市部で働く人たちが梅収穫作業にボランティアで参加。



＜中国人大学生「日本研究プログラム」＞

一社) 京都グローバルスタディ研究所(代表 松榮秀士氏)では、2024年1月に168人の中国人大学生12日間プログラムを実施。今年8月に30人がみなべ町スタディツアーに参加を計画中。



京都大学、同志社大学での講義、京都の文化体験、企業博物館訪問等



＜「みなべSDGs未来カフェ(2023年10月)」＞



町内の中高生約100人、町内外の大人約50人が参加。2050年の未来のみなべ町をテーマに語り合った。

＜おにぎりサミット調印式(2024年2月)＞



新潟県南魚沼市(米)、みなべ町(梅干)、新潟県村上市(鮭)、福岡県柳川市(海苔)、愛媛県今治市(塩)、埼玉県深谷市(ねぎ)、富山県魚津市(蟹)が参加。おにぎりを通じて、各地域の食材や文化を世界に発信していく計画で。2024年度は南魚沼市でイベントを開催予定。

＜スポーツイベントで熱中症予防効果をPR＞



梅の持つ、「疲労回復効果」や「熱中症予防効果」、「肥満抑制・美容効果」など梅の健康機能性を活かし、スポーツ大会などあらゆる機会を通じて情報発信



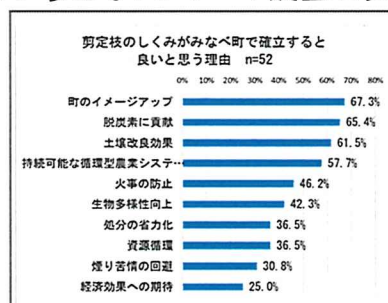
取組3) バイオ炭定量化事業



【背景・これまでの取組】

バイオ炭は、地表上の大気から炭素を除去する技術として土壌への炭素貯留効果とともに、土壌の透水性や保肥性などの土壌改良効果が認められており、土壌の生物多様性保全を通じた自然再興への貢献の可能性がある。2019年改良版のIPCCガイドラインにおいて世界的にCDR (Carbon Dioxide Removal、炭素除去)として認められたことを契機に、国内でも「バイオ炭の農地施用」が2020年9月に「J-クレジット」の方法論として認められ、農産物の環境価値や炭素クレジットを通じた循環経済の条件が整ってきた。

- ・町民の有志が立命館大学日本バイオ炭研究センターと共に町民向け勉強会を開催(9/15)町民80名が参加。アンケート調査を実施



- ・簡易炭化機による炭化実験などの勉強を2023年度に2回開催。和歌山県工業技術センターの協力を得て炭の質について計測。



↑バイオ炭化された梅剪定枝の炭の断面写真

「みなべ梅wo炭クラブ」主催「第2回バイオ炭勉強会」

【これからの取組(2024~2026年)】

立命館大学日本バイオ炭研究センターや和歌山県工業技術センターの協力を得て、梅剪定枝を地域資源として捉え、梅剪定枝の回収・炭化のしきみを構築。炭化による環境保全型農業を実現するシステム、GHGの可視化・定量化、J-クレジット創出や梅製品の環境価値の付与に関する社会実装を推進する。

1. 仕組みの構築

- ・梅剪定枝の収集・バイオ炭化・施用のしきみづくり
- ・モデル地域の設定: 収集~バイオ炭化
~梅林・田畑への施用試行
- ・中型炭化機の導入検討

2. バイオ炭由来のJ-クレジットの算定

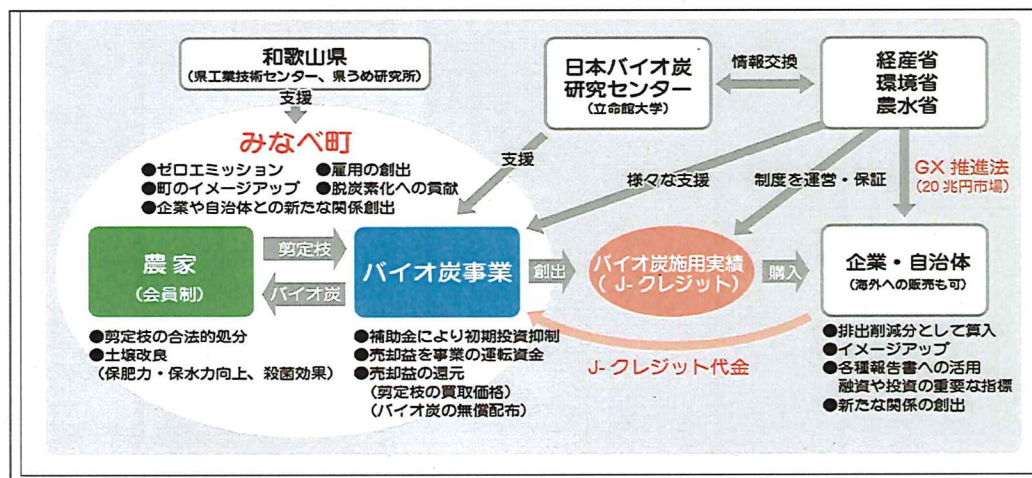
3. J-クレジットの需要調査・販売先の探索



写真 中型炭化機イメージ
(出典: 高槻バイオチャーエネルギー研究所)

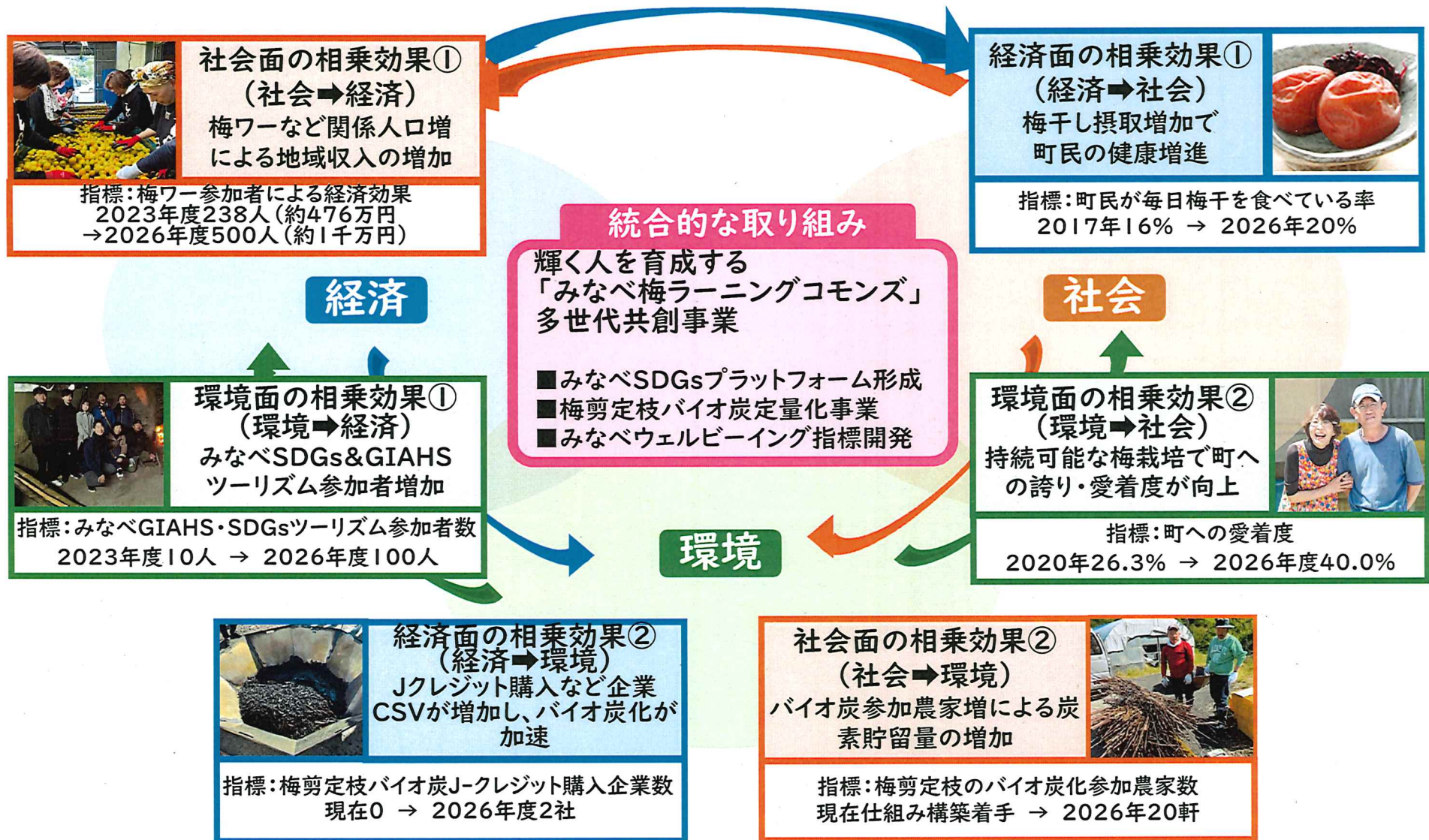
賦存量: 町内では1ヘクタールに約300本の梅が植えられており、町内で約639千本。剪定枝の量は推計年間9,067トンになる。ちなみに全量をバイオ炭にすると1,260トン、炭素貯留量は約2,500トンになる。

J-クレジット活用による梅剪定枝の循環システム(イメージ)





経済・社会・環境の各側面の相乗効果





自律的好循環の具体化に向けた事業の実施 ～国内外で「梅エコシステム」の実現～

